

環境教育研究マネジメントセンターは、2007年7月に、雲仙Eキャンレッジプログラムをはじめとしたフィールドにおける教育研究の充実を掲げ誕生した。大学の地域貢献は、言うまでもなくその重要性を増しており、大学と地域を結ぶマネジメントの役割を期待されるなかでの船出となった。筆者は、センター業務を中心となって担う教員として、2008年10月に環境科学部に着任した。その2日後には、雲仙キャンレッジ交流センターの開所記念講演会の運営に右も左もわからないまま従事したことを覚えている。同時に、センターに求められていた学生対象のフィールド体験活動の実施にも力点を置くようになり、毎年度地道にこれらの活動を蓄積していく意義を日々感じるようになっていた。

これらの取り組みは、学生や地域の方々に、環境意識の喚起や、フィールドを見つめる視点の涵養といった点において一定の役割を果たせたのではないかと思う。8年余りにおよぶ実績が評価され、本年3月31日を以って環境教育研究マネジメントセンターを発展的に解消し、活動の多くは翌4月1日に発足する本学水産・環境科学総合研究科附属アジア環境レジリエンス研究センターの環境教育研究部門に継承されることとなった。これまで地域からご支援いただいた関係各位には、深い感謝の念に堪えない。新センターにおいても、これまで以上に充実した地域貢献や学生のフィールド体験活動等が展開される見込みであり、引き続きご支援やご助力を賜りたい。

このような経緯から、本センター年報『地域環境研究』は、今号(第8号)で終刊を迎えることとなった。毎年恒例のことであるが、慌ただしいなかの編集作業となったものの、多くの方のご協力に支えられ刊行にこぎつけることができた。

今号は、大きく2つの内容で構成されている。1つは、本センターが主体的にかかわった事業や、学生への講義内容等を写真や当日のプログラムと合わせて紹介した第Ⅱ章である。とりわけ、同じように地域での活動をおこなっている機関、これから地域活動に取り組もうとしている方々にとって、少しでも有益な情報となり得るならば、この上ない喜びである。

もう1つは、地域活動に関する論文・実践報告等からなる第Ⅳ章である。今回は、5本の論考を掲載することができた。これらはいずれも本誌編集委員会の審査にもとづき、編集委員会で採録を決定したものである。とくに、今号では、新しい農業の形としての市民農園、食育、廃棄物処理と循環型社会のかかわりと、他分野にわたる投稿が目立った。ぜひご一読いただければ幸いである。

環境教育研究マネジメントセンターは、本誌の発行を最後に活動の幕を下ろす。毎年度、事務補佐員の雇用も難しく、慣れない事務的作業に四苦八苦の連続であった。しかし、むしろ「小回りが利く」という逆転の発想に立って、限りある予算のもと、センター長以下運営委員となっている教職員や時には学生ボランティアスタッフ有志も加わり一丸となって企画を練り上げていく過程には、独特の楽しさがあった。何と云っても、シンポジウムや市民公開講座に足を運んでくださる地域の方々の存在や、雲仙市小田山地区や長崎市大中尾棚田、島原半島ジオパーク、五島列島の小値賀島、そして遠くは鹿児島県三島村薩摩硫黄島など各所を引率し、目を輝かせながらフィールドに触れる学生の姿に接することは、他では得られないやりがいを感じさせてくれた。

最後に、これまで本センターの活動にご協力いただいた学内外の方々をはじめ、貴重な論考を寄せてくださった皆様に厚く感謝申し上げ、終刊の編集後記としたい。

(深見 聡)